

氏 名 : 椎谷 千秋  
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)  
学位記番号 : 博甲第 434 号  
学位授与年月日 : 令和 6 年 3 月 1 5 日  
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士  
学位論文名 : 家庭科教育における生活文化の学びの教育的意義

論文審査委員 : (主査) 教授 川端 博子  
(副査) 教授 山本 利一 准教授 小山 英恵  
教授 堀内 かおる 元所属教員 河村 美穂

## 学位論文要旨

本研究は家庭科教育における生活文化とは何かを明らかにし、生活文化の学びの教育的意義を検討することを目的とする。序章において問題の所在としたのは次の二点である。一つ目は文化、生活文化、伝統文化と用語が整理されないまま使われている点、二つ目は、伝統や文化の教育を充実させるにあたり、現在の学習指導要領とその解説の内容が伝統的な文化の教示に偏重する懸念が見え隠れしている点である。そこで家庭科教育がとらえる伝統や文化を整理し、どのように伝統や文化を学ぶのが望ましいかを検討する。その際家庭科が担う伝統と文化を表す用語として本研究では生活文化を用いた。

第一章では、家庭科教育学とその関連分野にあたる家政学、生活学それぞれにおける生活文化の概念を整理した。生活学では、生活は文化、文化は生活と生活も文化も同義反復の用語とみなしており、人とのかかわりから生み出されるものが生活であり文化であると位置づけていた。家政学には統一の見解はみられなかった。家政学では衣食住に関わる生活の生活手段や生活資料、すなわち「もの」の自然科学的側面の追求に偏っており、生活に関係する「ひと」や「こと」とのかかわりへの関心が追いついていない現状に気づいていた。家庭科教育学にもまた生活文化の唯一の定義はなかった。日本家庭科教育学会独自の定義も確認できず、生活文化の意味や用法も文献ごとあるいは同じ文献でも書き手によって異なっていた。その中で村田泰彦氏の家庭科教科理論は一定の影響を与えたことが推測された。しかし 2004 年以降村田らが構想した生活文化は徐々に大義から遠のく状況がうかがえた。

第二章では、家庭科学習指導要領とその指導書または解説から生活文化該当記述を抽出し、生活文化が伝統文化、生活様式、生活文化創造の 3 つの意味を持っていること、それぞれ日常性と創造性から特徴を説明できることを明らかにした。最近では伝統文化として捉える傾向にあるが、生活様式、生活文化創造としての生活文化としての捉え方とその価値を再確認する必要があることがわかった。また生活文化の学習内容が児童生徒の発達段階に沿って「気づく」―「適切に理解する」―「背景や価値を理解し、主体的に継承する」ものとして発展的に深化する学びとなっていた。

第三章では、家庭科教育研究の中での生活文化の扱いについて先行研究を中心に 84 本の文献を精読し動向を整理した。生活文化の捉え方の特徴からⅠ期(1960～1990年)、Ⅱ期(1991～2010年)、Ⅲ期(2011～2021年3月)に時期を区分して整理したところ、Ⅰ期は、家庭科の教科理論において、生活文化が【B 継承・創造するもの】として熱く語られ、Ⅱ期は、教育実践の文脈の中で生活文化の可能性、多様性が豊かに議論されていたが、Ⅲ期は、生活文化を伝統的かつ【A 継承すべきもの】として論じた文献が多数を占め 2011 年以降は伝統文化としての生活文化として見られる傾向にあることがわかった。

第四章では、2008 年以降の「機関誌家庭科研究」に掲載された「再現可能性あり」の授業実践記録を分析し「子どもの生活をまん中に」した授業とは授業内外での子どもの見取り方から、教師の授業のねらいと子どもの生活課題が一致した授業のことであり、教師の成長に伴い順を追って発展するものという結論が得られた。また望ましい実践記録のあり方として「本質的」に同じ授業をするために授業構想の契機を教師自身の主観性を尊重して書くことを制限しないことが重要であることがわかった。特に家庭科の実践記録には、子どもの生活の見取りを丁寧に書き、授業構想にどのように関わったかが分かるように書くことが大切であることがわかった。

第五章では、生活文化創造概念を用いた家庭科教育実践を構想、提案、検証した。日常性の低い「かつお節そのものやかつお節削り」と日常性の高い「削り節やかつおだし」を本教育実践によって経験的に接続し、歴史的な発展の経緯の延長線上に学習者の今の生活があり、それらは時間軸でつながっていることを五官(感)に訴えかけて印象付けるよう設計した。事前事後の質問紙調査結果より、授業の中で五官(感)を使って得られた学びに関する構成概念からなる【体験】、人々の生活の中で自然に生まれ、過去から現在の生活の中で伝承と創造を繰り返しながら存在するものやことに関する構成概念からなる【食文化】、調理技能に関する学びからなる【調理技能】の3つの学びが得られたことが明らかとなった。特に【食文化】における学習者の記述には題材の文化価値が表現されていたことから「生活文化創造」と「原体験」が学習者の学びに影響を与えたことが確認できた。よって本研究は、村田らが述べた生活文化による家庭科教育科理論とその実践が現代においても有効であることを学習者の記述より明らかにした。

以上より、家庭科教育における生活文化の学びの教育的意義とは、現在の生活にあるモノやコトの地理的・歴史的なつながりに気づき、それらの日常性、創造性が高まること、生活事象の持つ文化価値を理解することができ未来の生活文化創造の土台となること、生活文化の考え方によるものの見方が社会科学的認識の育成に貢献しうることと結論付けた。